

| Column |

## ART & CULTURE around 芸術



「わたしのこもりうた」上演時の様子

© 志藤康平



学習院大学わくわくとしま日本語教室と2022年に行ったワークショップの様子。  
言葉を使わずに棒を使って他者とつながるアクティビティ

### さまざまな文化や言語を尊重したアートプログラムを展開

## 「多文化共生」に向けて — 劇場ができること —

東京に住む外国人は約58万人（2023年1月時点）、180以上の国や地域の人々が暮らしている。東京芸術劇場では、2021年度から「多文化共生に向けたアートプログラム」に取り組んできた。国籍や習慣、言語などの異なる人々が共に生き、共に活躍するために、アートはどのようなアプローチができるのか。劇場としてできることを考え、さまざまな企画を実践している。

2021年9月には、豊島区とその周辺に住む外国人が生活者向けの日本語を学ぶ「学習院大学わくわくとしま日本語教室」でワークショップを開催。演劇や音楽、ダンスを専門とするファシリテーターのもと、「タクシーに乗る」「病院へ診察に行く」といった日常のシーンを実演するなど、実用的な日本語に親しむ取り組みを5回にわたって行った。

2022年度は、キュレーターの宮本武典と影絵師・音楽家の川村亘平齋と共にアートプロジェクトを実施。彼らはこれまで外国にルーツをもつ人々の「東京」をめぐるオーラルヒストリーを影絵作品にしてきた。プロジェクトは3回行われ、国際ショナルイスラミーヤスクール大塚、学校法人香川学園メロス言語学院、NPO法人 Mother's Tree Japanの3団体と影絵制作でつながった。1回目は多国籍ムスリムの子どもたちとのワーク

ショップ「ニュー・トーキョー・アラベスク」、2回目は母国を離れ、日本での就職・就学を目指す若者たちが自らの姿を物語る「東京と変身」、そして3回目が東京で出産・育児に奮闘する母親たちの声を届ける「わたしのこもりうた」。いずれも、当事者自身が影絵という表現を通して思いを伝えた。

日本在住の外国人に向けたやさしい日本語での劇場ツアーも試行している。話し方やビジュアル面を工夫して理解を深めてもらおう劇場案内だ。現在はいくつかの当事者団体に参画してもらいフィードバックを受けている段階で、本格的な実施に向けてトライアルを重ねている。

2023年度は、さらにドイツなどの多文化共生に関して先進的事例のある海外の劇場視察の成果もプログラムに反映し、ワークショップなども実施していく。

日本語が不得手なことによって取り残されてしまう人たちが多く存在している。言語だけでなく、ジェスチャーなど身体も使って他者と対話することを通して、確実に相互理解は深まる。異なる文化や創造性をもつ人たちが共に生きる豊かな社会を目指し、劇場だからこそできる多文化共生にこれからも向き合っていく。

### INFORMATION

東京芸術劇場では、劇場をご利用になるすべての方の安全と安心のため、新型コロナウイルス感染拡大防止に関する取り組みをおこなっています。ご来館される皆さまは、当劇場ウェブサイトの【東京芸術劇場における新型コロナウイルス感染症対策とご来館される皆さまへのお願い】や館内掲示されている注意事項などを、ご確認ください。

次号の発行は2023年7月1日を予定しています。



#### 〈鑑賞サポート〉について

東京芸術劇場では、一部の事業で、視覚・聴覚障害者のための舞台鑑賞サポートやヒアリンググループ、各種割引、託児サービスなどの〈鑑賞サポート〉を行っております。ぜひご利用ください。  
詳細 ▶ 劇場HP内「鑑賞のサポート」ページ  
[www.geigeki.jp/access/support.html](http://www.geigeki.jp/access/support.html)

新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に変更がでる場合がございます。  
最新情報は、東京芸術劇場ホームページ等でご確認ください。

# 東京 芸術 劇場

Tokyo  
Metropolitan  
Theatre